

# 関羽と劉淵

— 関羽像の成立過程 —

大塚 秀 高

まえがき

後漢の末、各地の軍閥が中原の鹿を逐った時代から、後漢の滅亡と魏呉蜀三国の鼎立を経て晋の天下統一に至る時代をえがく『三国志演義』は、中国はもちろん、日本にも少なからざる読者をもっている。この『三国志演義』の作者に擬せられるのが元末明初の人羅貫中である。とはいえ、羅氏の原稿はもとより、それを忠実に反映したとみなしうるテキストすら現存していない現在、仮に羅氏に『三国志演義』の著作権を認めるにせよ、その果たした役割を正確に秤量することは困難である。中国大陸の研究者は、現存する各種テキストの比較検討により、それらのもとづく祖本を想定することに熱心であり、そうした試みが相当な成果をあげていることは事実である。ただ、かくて想定された祖本こそが羅氏の原作だとなると、にわかには同意は出来かねる。それはあくまでも現存テキストの祖本であるにとどまろう。かくいう筆者の意図は決して羅氏の創作能力をおとしめることにあるわけではない。議論の筋道を問題

にしているに過ぎないのである。かくて筆者の興味は羅貫中の創作云々ではなく、それ以前の三国志物語から『三国志演義』<sup>(2)</sup>への変化にむかうことになる。羅氏が大手筆であつたにしても（その作とされる諸雜劇に照らし、この点に疑問の余地はないのだが）、『三国志演義』の創作においては、その当時までに成立していた口頭と文字、双方の三国志物語にその創作の筆は掣肘されざるを得なかつたはずだからである。つまり、大きな変更はこれ以前の段階でなされ、『三国志演義』では小規模な修正がなされたに過ぎない、あるいは史実に準拠するとの建前のもと、極端から中庸への揺り戻しがなされた場合もあつたに違いない。当時であつては、否、今世紀にはいつても、口頭のテキストは文字化されぬ限り後世のわれわれに残されることはなかつたわけだが、幸運にめぐまれ文字化されたテキストにしても、三国志物語全体をカヴァーするものは望むべくもなかつた。そのほとんど唯一の例外ともいふべき貴重なテキストが『全相平話三国志』であつた（以下これと同内容の『至元新刊全相三分事略』とあわせ『三国志平話』と略称する。なお、以下における引用は前者によつた）。『三国志演義』はもちろんのこと、『三国志平話』についても、これまであまたの研究者によつて研究がなされてきており、いまさらなにをと思われるむきもあるかも知れないが、この間にあつてはまだ十分には論ぜられていない問題もあるやに感ぜられる。以下で論ぜんとする関羽像の成立過程の問題もそのひとつである。

『三国志演義』と『三国志平話』とはテキストのポリウムが圧倒的に異なる。叙述に濃淡の差が生ずるのは不可避であつた。のみならず、両者は構成から重点的に取り上げる人物まで異なつていた。『三国志演義』のそれは前半が関羽、後半が孔明であつて、孔明を継ぐものはいなかつた。孔明の死後、味気ない感のする所以である。対する『三国志平話』で活躍するのは張飛であつた。個々の話柄、たとえば『三国志演義』では関羽の独壇場の感のある「過五

関斬六将」にしても、『三国志平話』では一言半句の言及さえなされていなかった。だが、そうした点についてはいまさら論ずるまでもなからう。

『三国志演義』と『三国志平話』とは構想、その根底に横たわる思想が決定的に異なると論じたのは金文京であった。<sup>(3)</sup>金はこれを王朝の正統と民族の血統という言葉で表現した。モンゴル族の征服王朝元にかわった漢族の王朝の創世期に成立した『三国志演義』が晋の三国統一をもって全編を締め括るのに対し、元朝の盛期に刊行された『三国志平話』が漢帝外孫を称する匈奴の劉淵による漢の再興をもって終わる点をとらえた巧みな言葉であった。私見によれば、この結末部分と、『三国志平話』の巻頭を占め、『三国志演義』ではその痕跡すらうかがえぬ司馬仲相の陰司裁判とは首尾呼応するもののだが、この点については機を改めて論ずることとして、小論ではもっぱらこの漢帝外孫劉淵と関羽にかかわる問題について検討を加えてゆくこととしたい。

#### 一 漢帝外孫劉淵（一）——『魏書』と『晋書』

劉淵はいつたい如何なる人物として史上にその名をとどめているのであろうか。だが、その点の検討に先立つては『三国志平話』において劉淵が如何に形象されているかを見ておく必要がある。以下に巻下「西上秋風五丈源（原）」の末尾、『三国志平話』の掉尾を飾る部分を引く所以である。

漢帝勅諸辺將皆降。姜維得詔，及衆將怒，以刀斫石，不得已而降。晋王封漢帝為扶風郡王。走了漢帝外孫劉淵，投北去了。……

劉淵幼而雋異，尊儒重道，博習經史，兼學武事。及長，猿臂善射，氣力過人，豪傑多士歸之。其子劉聰，驍勇絕人，博涉經史，善屬文，彎弓三百斤，京師名士与之交結，聚英豪數十萬衆。都於左國城，天下歸之者衆。劉淵謂衆曰「漢有天下久長，恩結於民。吾乃漢之外甥，舅氏被晉所虜，吾何不與報仇。」遂認舅氏之姓曰劉，建國曰漢。遂作漢祖故事，稱漢王。改元元熙，追尊劉禪為孝懷皇帝，作漢三祖五宗神主而祭之。立其妻呼延氏為后，劉宣為相，崔滌為御史，王宏為大尉，危隆為大鴻臚卿，朱恕為太常卿，陳達為門侍，其姪劉曜為建武將軍。三年正月，徙都平陽府，即皇帝位。

却說漢王領軍數十萬，前至洛陽伐晉。晉懷帝出迎敵，陣敗，漢兵執之，殺而祭于劉禪之廟。……漢王遂滅晉國，即漢皇帝位。遂朝漢高祖廟，又漢文帝廟、漢光武廟、漢昭烈皇帝廟、漢懷帝劉禪廟而祭之，大赦天下。

漢君懦弱曹吳霸 昭烈英雄蜀帝都 司馬仲達平三國 劉淵興漢鞏皇國

以上をもつて『三国志平話』は全編の終わりをむかえるわけであるが、最後の「漢君」云々の七言絶句、既述のごとく、卷上冒頭の七言絶句「江東吳土蜀地川 曹操英勇占中原 不是三人分天下 來報高祖斬首冤」と明らかに呼応している。

さて問題の劉淵であるが、『魏書』の劉聰の伝に関連する記事があり、『晋書』に伝が立てられている。以下ではその成立順に従い、『魏書』の方から見てゆくことにしよう。なお、ここでいう『魏書』は陳寿の『三国志』の『魏書』、いわゆる『魏志』ではなく、北朝の魏、北魏を対象に、北斉の魏収によって編纂されたものをさす。以下にその卷九五列伝第八三匈奴劉聰伝の関連部分全文を引こう（劉聰は劉淵の息子である）。

父淵，形容偉壯，膂力過人。晋初為任子，在洛陽。豹卒，淵代之。後改帥為都尉，以淵為北部都尉。楊駿輔政，

以淵為建威將軍、五部大都督，封漢光鄉侯。後坐部民叛出塞，免官。永寧初，成都王穎表淵行寧朔將軍，監五部軍事。

及齊王冏、長沙王乂與穎等自相誅滅，北部都督劉宣等竊議反叛，謀推淵為大單于。時淵在鄴，乃使呼延攸以此謀告之。淵請歸會葬，穎不許。穎為皇太弟，以淵為太弟屯騎校尉。晉惠帝之伐穎也，以淵為輔國將軍、都督北城守事。及惠帝敗，以淵為冠軍將軍，封盧奴伯。既而并州刺史司馬騰、幽州刺史王浚，起兵伐穎，穎師戰敗。淵謂穎曰「今二鎮跋扈，衆踰十萬，恐非宿衛及近郡士民所能禦之。淵當為殿下還說五部，鳩合義衆，以赴國難。」穎悅，拜淵為北單于，參丞相軍事。

淵至左國城，劉宣等大單于之號，二旬之間，衆便五萬，都於離石。淵謂宣等曰「帝王豈有常哉，當上為漢高，下為魏武。然晉人未必同我，漢有天下世長，恩德結於民心，吾又漢氏之甥，約為兄弟，兄亡弟紹，不亦可乎。今且可稱漢，追尊後主，以懷民望。」乃遷於左國城，自稱漢王，置百官，年号元熙，追尊劉禪為孝懷皇帝。攻擊郡県。

桓帝十一年，晋并州刺史司馬騰來乞師，桓帝親率万騎救騰，斬淵將基母豚，淵南走蒲子。語在序紀。

晋光熙元年，淵進擿河東，克平陽、蒲坂，遂都平陽。晋永嘉二年，淵称帝，年号永鳳。後汾水中得玉璽，文曰「有新保之」，蓋王莽之璽也。得者因增「淵海光」三字而獻之，淵以為己瑞，号年為河瑞。以聰為大司馬、大單于、録尚書事，置單于台於平陽西。淵死，子和僭立。聰即和第四弟也，殺和而自立。

長々と引用したのは、この段階ですでに劉淵が自身を「漢氏之甥」と宣言し、この立場から漢王を自称したのち劉禪を孝懷皇帝に追尊したことが記されていることを示しておきたかったからである。だが、『三國志平話』に見える、

漢の三祖五宗の神主を作り祭ったことへの言及はなかった。ところが『晋書』にはこれが見えている。

そもそも、対象とする時代からして、『晋書』は『魏書』以前に編纂されてしかるべきものであった。諸般の事情によつて遅れたそれがようやくよくなつたのは唐の房玄齡らによつてであった。唐を興した李氏は漢族ではなく鮮卑系といわれる。正史の編纂はすぐれて政治的な営為であったから、『晋書』の編纂にあたり、出自が漢族ならざる点で共通し、なおかつ高祖李淵と諱を同じくする劉淵の伝をかりて唐朝の行為を粉飾鼓吹する意図が房玄齡らになつたといえまい。『魏書』では子の聰の伝に合わせ言及されるに過ぎなかつた劉淵の伝を独立させ、しかも載記のトップに置くとする行為にも意図的なものが感ぜられなくはない。ひるがえつて、『魏書』の編纂を魏収に命じた北斉の高氏も鮮卑族だつたとされる。さすれば『魏書』の劉淵関係の記事からしてそうした意図のもとに編纂されていた可能性も否定は出来まい。劉聰伝の冒頭には「漢高祖以宗女妻冒頓，故其子孫以母姓為氏」なる一文が見えていた。

さて劉淵の伝であるが、『晋書』卷一〇一載記第一劉元海に見える。以下には『三国志平話』と関係する部分のみを引こう（劉淵を劉元海とするのは唐の太祖李淵の諱を避け、字により伝を立てたからである）。

……吾又漢氏之甥，約為兄弟，兄亡弟紹，不亦可乎。且可稱漢，追尊後主，以懷人望。」乃遷于左国城，遠人歸附者数万。

永興元年，元海乃為壇于南郊，僭即漢王位，下令曰「昔我太祖高皇帝以神武応期，廓開大業。太宗孝文皇帝重以明德，升平漢道。世宗孝武皇帝拓土攘夷，地過唐日。中宗孝宣皇帝搜揚俊乂，多士盈朝。是我祖宗道邁三王，功高五帝，故卜年倍於夏商，卜世過於姬氏。而元成多僻，哀平短祚，賊臣王莽，滔天篡逆。我世祖光武皇帝誕資聖武，恢復鴻基，祀漢配天，不失旧物，俾三光晦而復明，神器幽而復顯。顯宗孝明皇帝，肅宗孝章皇帝累葉重暉，

炎光再闢。自和安已後，皇綱漸頽，天步艱難，國統頻絕。黃巾海沸於九州，群閹毒流於四海，董卓因之肆其猖勃，曹操父子凶逆相尋。故孝感委棄万国，昭烈播越岷蜀，冀否終有泰，旋軫旧京。何凶天未悔禍，後帝窘辱。自社稷淪喪，宗廟之不血食四十年于茲矣。今天誘其衷，悔禍皇漢，使司馬氏父子兄弟迭相殘滅。黎庶塗炭，靡所控告。孤今猥為羣公所推，紹修三祖之業。顧茲阨閹，戰惶靡厝。但以大恥未雪，社稷無主，銜胆栖冰，勉從群議。乃赦其境內，年号元熙，追尊劉禪為孝懷皇帝，立漢高祖以下三祖五宗神主而祭之。立其妻呼延氏為王后。置百官，以劉宣為丞相，崔游為御史大夫，劉宏為大尉，其餘拜授各有差。

しからば、『三国志平話』の結末部分は『魏書』ならぬ『晋書』を参照することによって構成されたのでなければならぬ。

ひるがえって、宋元の間における『晋書』刊行の状況であるが、尾崎康によれば、現存のものに限っても六種を数え、『三国志平話』と同じ建安刊本も存在し、現存する二種の南宋刊本はいずれも建安の坊刻本のうえ(4)（前期一四行小字本と中期一〇行大字本）、後者には元覆刊本もあるという。かくてますます『三国志平話』と『晋書』の関係が注目されることになるわけである。

## 二 漢帝外孫劉淵（二）——『資治通鑑』と『通鑑紀事本末』

しかし、劉淵のことを記す史書は正史に限るまい。たとえば司馬光の『資治通鑑』にも劉淵に言及する部分があった。編年体史書の特性から関連する記事が分散するきらいがあり、座右に置いて参照するに便とはいいがたいが、『三

『国志平話』の編者（以下単に編者と称する）ないしはそのもとづく口頭のテキストを語っていた説話人（以下これ単に説話人と称する）が、これを参照していた可能性を否定しきってしまうわけにはゆくまい。よって以下にその『三国志平話』の結末部分に関わる部分を引き、検討してみることとしたい（巻第八五晋紀七孝惠皇帝中之下・永興元年）。

初、太弟穎表匈奴左賢王劉淵為冠軍將軍，監五部軍事，使將兵在鄴。淵子聰，驍勇絕人，博涉經史，善屬文，彎弓三百斤，弱冠游京師，名士莫不与交。穎以聰為積弩將軍。……

劉淵遷都左國城，胡、晋帰之者愈衆。淵謂羣臣曰「昔漢有天下久長，恩結於民。吾，漢氏之甥，約為兄弟，兄亡弟紹，不亦可乎。」乃建國号曰漢。劉宣等請上尊号。淵曰「今四方未定，且可依高祖称漢王。」於是即漢王位，大赦，改元曰元熙。追尊安樂公禪為孝懷皇帝，作漢三祖五宗神主而祭之。立其妻呼延氏為王后，以右賢王宣為丞相，崔游為御史大夫，左於陸王宏為大尉，范隆為大鴻臚，朱紀為太常，上党崔懿之、後部人陳元達皆為黃門郎，族子曜為建武將軍。……

しかく『資治通鑑』にも『魏書』や『晋書』と同じく「漢氏之甥」の文字、劉禪を追尊して孝懷皇帝とし、漢の三祖五宗の神主を作り祭ったとの記事が見えるから、『三国志平話』の編者（ないし説話人、以下この両者のいずれかの意味の場合、「編者」と表記することにした）が参照した文献を『晋書』と特定することは出来まい。いささか離れてはいるが、巻第七九晋紀一世祖武皇帝上之上の泰始六年には「初魏人居南匈奴，五部於并州諸郡，与中国民雜居。自謂其先漢氏外孫，因改姓劉氏」の文も見えていた。それよりなにより、『三国志平話』に見え、『魏書』には見えぬ（『晋書』には一部が見える）、妻の呼延氏を立てて后とし云々の記載が『資治通鑑』に見えている点は見逃せまい。



まして『三国志平話』に見える誤脱の原因が『資治通鑑』によつてのみ説明可能であるにおいてをや、である。崔游の淤、危隆の危、朱怨の怨は『三国志平話』の編者ないし刻工が字形の類似により游、范、紀を誤つたもの、王宏は左於陸王宏の左於陸王が右賢王同様の封号だとわからなかつたための誤り、陳達は単なる元の脱字に相違ない。こうなると、『三国志平話』の「編者」が参照した文献は『晋書』でなく『資治通鑑』であつた可能性が高まろう。そもそも『晋書』を参照していれば、劉宏を王宏と誤るわけがなかつた。司馬光の『資治通鑑』二九四卷には多数の宋刊本が存在しており、方品光によれば、「入注附音資治通鑑 一百卷 不著編輯名氏」のごとき「南宋建陽書坊刻本」さえ刊行されていたといふ<sup>(5)</sup>。のみならず、『資治通鑑』にはこれを紀事本末体に変えた『通鑑紀事本末』のごとき書物も刊行されており、そこでは劉淵関係の記事が一括されていた。これなら「編者」の参照にずいぶん便利だつたに相違ない。先に引いた『資治通鑑』と重複することになるが、その巻第一三「劉淵擬平陽 殺太弟又附」の関連部分を以下に引いておこう。

晋武帝泰始六年 初魏人居南匈奴，五部於并州諸郡，与中国民雜居。自謂其先漢氏外孫，因改姓劉氏。

咸寧五年 初……豹子淵幼而雋異，師事上党崔游，博習經史，嘗謂同門生上党朱紀、雁門范隆曰「吾常恥隨陸無武，絳灌無文。隨陸遇高帝而不能建封侯之業，絳灌遇文帝而不能興庠序之教，豈不惜哉。」於是兼學武事。及長，猿臂善射，膂力過人。姿貌魁偉。……

永興元年 初太弟顥表匈奴左賢王劉淵為冠軍將軍，監五部軍事，使將兵在鄴。淵子聰，驍勇絕人，博涉經史，善屬文，弯弓三百斤，弱冠游京師，名士莫不與交。顥以聰為積弩將軍。……冬十月，劉淵遷都左国城，胡、晋帰之者愈衆。淵謂羣臣曰「昔漢有天下久長，恩結於民。吾，漢氏之甥，約為兄弟，兄亡弟紹，不亦可乎。」乃建国

号曰漢。劉宣等請上尊号。淵曰「今四方未定，且可依高祖称漢王。」於是即漢王位，大赦，改元曰元熙。追尊安樂公禪為孝懷皇帝，作漢三祖五宗神主而祭之。立其妻呼延氏為王后，以右賢王宣為丞相，崔游為御史大夫，左於陸王宏為大尉，范隆為大鴻臚，朱紀為太常，上党崔懿之、後部人陳元達皆為黃門郎，族子曜為建武將軍。……

『通鑑紀事本末』の編者袁枢は『三国志平話』が刊行された建安の人であつて、南宋の高宗紹興元年に生まれ、寧宗の開禧元年に死んだ。『通鑑紀事本末』の完成は孝宗の乾道九年、同じ孝宗の淳熙三年に嚴州で小字本が、理宗の宝祐五年に湖州で大字本が刊行されている。引用した『四部叢刊』所収本は湖州刻大字本であつた。

では『三国志平話』の「編者」は『資治通鑑』ないし『通鑑紀事本末』のいずれか、あるいはこれ以外の『通鑑』系統の史書のいずれかのみによつて『三国志平話』の結末部分を構成したのであるうか。<sup>(6)</sup>おそらくそうではあるまい。なぜなら、この二書には『三国志平話』に見える三祖五宗の具体的な名があげられていなかったからである。とはいへ、『三国志平話』にも三祖五宗の名すべてがあげられているわけではなく、誰にとつても明白な三祖と間違いなさそうな文帝だけをあげたとみることも出来なくはない。しかし、筆者は上記二書のいずれかのみならず、『三国志平話』の「編者」は参照していたと考えるものである。

### 三 関羽と劉淵

それでは『三国志平話』の「編者」が『晋書』を参照したと筆者がみなすゆえんは何か。

清の盧湛の『関聖帝君聖蹟図誌全集』巻一所収の「全図考」は全五十一の図によつて関羽の生涯を絵解きしたもの

であるが、その「聖帝遺像」及び「詣郡陳言」は関羽が『春秋左氏伝』を好んだことを以下のごとく特記している。

聖帝遺像 聖帝姓関，諱 字長生，又雲長。後主追諡壯繆侯。…河東解梁人，夏忠臣龍逢後也。身長九尺六寸，鬚長一尺八寸。面如熏棗，唇若丹硃，鳳目鸞眉，臉有七痣。德全五行，通易伝春秋，志持漢鼎。

詣郡陳言 聖帝生而英奇，及長，膂力敵万夫。忠孝性生，讀書明易伝，尤好左氏春秋，以古今事為己任。…李福清の研究によつても、清代以降の関羽座姿を描く絵画に『春秋左氏伝』とおぼしき書物が見えることが確かめられる。<sup>(7)</sup>しかく清代以降の者には関羽と『春秋左氏伝』とはわかちがたく結びついていたのである。この点については『三国志平話』も同様であつた。以下にそれを証する部分を引いておこう。

話說一人姓関名羽字雲長，乃平陽蒲州解良人也。生得神眉鳳目虬髯，面如紫玉，身長九尺二寸，喜看春秋左伝。観乱臣賊子伝，便生怒惡。因本県官員貪財好賄，酷害黎民，将県令殺了，亡命逃遁，前往涿郡。（卷上）

張遼在於庁下。美髯公問曰「徐州是失，皇叔張飛不知存亡。」張遼曰「乱軍所殺也。」美髯公哭曰「吾死不懼。爾来莫非説我乎。」遼曰「不然。雖皇叔張飛為乱軍所殺，公将家屬不知何処。倘若曹兵至城下，豈不事有尙難。関公自小読書，看春秋左氏伝，曾応賢良挙，豈不解其意，曹操深愛。」（卷中「関公襲車胄」）

ところが『三国志演義』の関羽はそうした人物に強調されていないように見える。おそらくその唯一の例外ともいふべきものが巻一〇の「関雲長義積曹操」に見える以下の部分であつた。

操曰「五関斬将之時，還能記否。古之人大丈夫處世，必以信義為重。將軍深明春秋，豈不知庾公之斯追子濯孺子者乎。」雲長聞之，低首良久不語。当時曹操引這件事，説猶未了，雲長是箇義重如山之人，又見曹君（軍）惶惶，皆欲垂涙。雲長想起五関斬将放他之恩，如何不動心。于是把馬頭勒回，与衆軍曰「四散擺開。」這箇分明是放曹操

的意。

案ずるに、これはそれ以前の三国志物語にあつては主流であり、その成立以後も民間の三国志物語にあつてはそうであつた関羽の形象を、『三国志演義』の編者が陳寿の『三国志』に見えるそれに近づけんとした結果ではなかつたか。陳寿の『三国志』には関羽が『春秋』ないし『春秋左氏伝』を好んだとの記述は見当らない。これに言及する最古の文献は『三国志』巻五四呉書九呂蒙伝第九所引の『江表伝』である。以下にそれを引こう。

蒙曰「士別三日，即更刮目相待。大兄今論，何一称穰侯乎。兄今代公瑾，既難為繼，且与関羽為鄰。斯人長而好学。読左伝略皆上口。梗亮有雄氣，然性頗自負，好陵人。今与為對，当有单復以郷待之。」

『江表伝』は普の虞溥の撰とされ、『玉函山房輯佚書補編』に清の王仁俊による輯本が収められていた。このことは、陳寿こそ『三国志』にとらなかつたが、その当時すでに、関羽が『春秋左氏伝』を好んだとする言説もなされていたことを意味する。

しからば関羽と『春秋』ないし『春秋左氏伝』の関係は如何にしてかくも強固なものとなつたのか。案ずるに、『三国志平話』の「編者」は『江表伝』に見える関羽の形象にインスピレーションをえ、『晋書』の劉淵のそれを『三国志』の関羽のそれにオーバー・ラップさせたものではなかつたか。『晋書』の劉元海載記によれば、劉淵も『春秋左氏伝』を好んだとされる。

幼好学，師事上党崔游，習毛詩，京氏易，馬氏尚書，尤好春秋左氏伝，孫吳兵法，略皆誦之，史、漢、諸子，無不綜覽。

関羽は『三国志』巻三六蜀書六関張馬黃趙伝第六の関羽の伝によれば、美しい鬚髯をその身体的な特徴としていた

(羽美鬚髯，故亮謂之髯)。この特徴はその後の関羽の形象が完成してゆく際の基本的な要素ともなった。かくて『三国志平話』の「編者」はそれを「生得神眉鳳目虬髯，面如紫玉，身長九尺二寸」「美髯公」と表現し、『三国志演義』の巻一「祭天地桃園結義」はさらにそれを拡張して以下のごとく表記した。

玄德看其人，身長九尺三寸，髯長一尺八寸，面如重棗，唇若抹朱，丹鳳眼，臥蚕眉，相貌堂堂，威風凜凜。

丹鳳眼や臥蚕眉の意味するものについては小川陽一の研究があるが、髯の長さについてはどこからきたと考えるべきなのであるか。案ずるに、これも劉元海載記からきたに相違ない。劉淵も髯ではないものの鬚をその身体的特徴としていたからである(鬚と髯は同じひげであっても生える部位が異なり別物であるが、『三国志』の関羽の伝を引くまでもなく、両者は同一視されるのが一般的であった。なお、劉淵の鬚について言及するのは『晋書』に限られる。これも『三国志平話』の「編者」が『晋書』をも座右においていた傍証となる)。以下に該当する劉元海載記を引く。

於是遂学武事，妙絶於衆，猿臂善射，膂力過人。姿儀魁偉，身長八尺四寸，鬚長三尺餘，当心有赤毫毛三根，長三尺六寸。有屯留崔懿之、襄陵公師彘等，皆善相人，及見元海，驚而相謂曰「此人形貌非常，吾所未見也。」於是深相崇敬，推分結恩。

さらにいえば、関羽も劉淵同様玉璽を水中で発見していた。この点も関羽と劉淵をオーバー・ラップさせるうえであずかって力があつたに相違ない。『三国志』卷三二蜀書二先主伝第二から、関羽が漢水中に玉璽を発見した記事を引こう。

又前関羽困樊、襄陽，襄陽男子張嘉、王休献玉璽，璽潜漢水，伏於淵泉，暉景燭耀，靈光徹天。夫漢者，高祖

本所起定天下之國号也。大王襲先帝軌跡，亦興於漢中也。今天子玉璽神光先見，璽出襄陽漢水之末，明大王承其下流，授与大王以天子之位，瑞命符應，非人力所致。

これに対し、劉淵は汾水中から玉璽を発見した。既引の『魏書』にも関連する記事が見えるが、ここでは劉元海載記のそれを引いておこう。

於是遷都平陽。汾水中得玉璽，文曰有新保之，蓋王莽時璽也。得者因增泉海光三字，元海以為己瑞，大赦境内，改年河瑞。封子裕為齊王，降為魯王。

かくて『三国志平話』の「編者」は『資治通鑑』ないし『通鑑紀事本末』のいずれか（もちろんこれ以外のあまたある『通鑑』系統の史書のいずれかである可能性を否定するものではないが）と『晋書』を座右に置き、『三国志平話』巻末に漢帝外孫劉淵による漢王朝再興の物語を付加するとともに、『晋書』劉淵載記に見える劉淵の形象により関羽のそれを肉付けしたとの結論にいたるのである。

### 小結

最後にあたり、関羽の、夙に『三国志平話』に認められ、『三国志演義』成立以後も民間の三国志物語にあつては一般的だったにもかかわらず、『三国志演義』では意図的に削除された<sup>(9)</sup>とみなせる龍神の要素が、いかにして関羽に結びつくにいたったかについて一言し、小論を締め括ることにしたい。

『晋書』の劉元海載記には次のごとき記載があった。

豹妻呼延氏，魏嘉平中祈子於龍門，俄而有一大魚，頂有二角，軒髻躍鱗而至祭所，久之乃去。巫覡皆異之，曰「此嘉祥也。」其夜夢日所見魚變為人，左手把一物，大如半雞子，光景非常，授呼延氏，曰「此是日精，服之生貴子。」寤而告豹，豹曰「吉徵也。吾昔從邯鄲張罔母司徒氏相，吾當有貴子孫，三世必大昌，仿像相符矣。」自是十月而生元海，左手文有其名，遂以名焉。

劉淵之母呼延氏が龍門で子を授けてくれるよう祈ったら頂に二角のある大魚が現われ、なおかつ、その夜の夢に人に化したその魚が現われ、こぶりの卵を呑むよう授けられて十三ヵ月後に生まれたのが劉淵だとするのだから、劉淵を龍神の子というに等しい。この物語は九隆伝説と無関係ではあるまい。この形式の物語は少数民族の始祖伝説に目立つ。かくて劉淵は再興された漢王朝の始祖となったのである。

『晋書』にはさらに次のごとき記載も見いだせる。

後秦涼覆没，帝疇咨將帥，上党李熹曰「陛下誠能殄匈奴五部之衆，假元海一將軍之号，鼓行而西，可指期而定。」孔恂曰「李公之言，未足殄患之理也。」熹勃然曰「以匈奴之勁悍，元海之驍兵，奉宣聖威，何不尽之有。」恂曰「元海若能平涼州，斬樹機能，恐涼州方有難耳。蛟龍得雲雨，非復池中物也。」帝乃止。

この例など劉淵を池中の蛟龍にたとえたに過ぎないものであるが、かくのごとき些末な記載であっても、劉淵が関羽にオーバー・ラップされていたのちは、その龍神要素の付加にながしかの効果をもらったに相違ない。

ひるがえって考えるに、『晋書』における劉淵の形象には『魏書』にないものが加わっている。鬚に代表される身体的特徴や『春秋左氏伝』の愛好がそれである。案ずるに、『晋書』は劉淵のこうした形象を『三国志』（ならびに裴注『江表伝』）の関羽のそれから借りたものではなかったか。そしてその契機となったものこそ両者に共通する玉璽発見の

事実であつたに相違ない。かくて劉淵は関羽からその鬚と『春秋左氏伝』愛好を継承したのだが、その時点で関羽と劉淵はメビウスの輪の表と裏のごとき関係になつてしまつた。『三国志平話』の関羽が『晋書』の劉淵からその龍神の要素を受け継ぎ、『春秋左氏伝』への傾倒を深めることとなつたゆえんである。筆者は以上のごとく考えているのだが、いかがなものであろうか。大方の御叱正をおおぎたい。

1 小論ではこの言葉であらゆる文献に見える三国時代を扱う物語のすべてをさすことにする。当然陳寿の『三国志』に見えるものもその例外ではない。なお、物語については拙論『從物語到小説——中国小説生成史序説』（『文学遺産』一九九四年第二期所収）を参照されたい。

2 理屈としては現存するすべての『三国志演義』の源頭に位置する祖本を想定し、それを議論の対象としなければならぬわけであるが、小論がこの名のもとに引用するのはいわゆる嘉靖本である。これは嘉靖本がもつともそれに近いと判断したためではなく、筆者に小論に引用する箇所すべてにわたるそれを想定するいとまがなく、嘉靖本が完全な形で現存し、影印本によつて目睹しうる最古の『三国志演義』の版本であるからに過ぎない。なお、嘉靖本にも正確には二種あるわけであるが、小論で引用する部分に相違は見られない。

3 『羅貫中の本貫』、『中国古典小説研究動態』第三号所収、一九八九年十二月。

4 『正史宋元版の研究』（汲古書院、一九八九年一月）の序章第二節二「三国志・晋書・旧唐書」ならびに終章五「晋書」による。

5 『福建版本資料匯編』（福建師範大学図書館、一九七九年九月方品光小引）による。

6 たとえば朱熹の編になる『資治通鑑綱目』巻第一七の「劉淵自称漢王」の目には劉宣、崔游、陳元達、劉曜の名しか上がつ



ていないから『三国志平話』の「編者」の参照した文献たり得ない。

7 「関羽肖像初談（下）」、『歴史文物』第五卷第一期所収、一九九五年五月。

8 「明代小説における相法——三国志演義と金瓶梅詞話を中心に」、『東方学』第七十六輯所収、一九八八年七月。のち小川の『日用類書による明清小説の研究』（研文出版、一九九五年十月）の第三篇第一章に「明代小説における相法」として収められた。

9 この点については拙論「関羽の物語について」（『埼玉大学教養学部紀要』第三〇巻、一九九五年三月）を参照されたい。